

子どもの最善の利益を 考えた保育集団発達論の 調査研究

(川田 学氏)

「研究成果報告書」を 読む手がかり

はじめに

川田 学氏（北海道大学大学院准教授）へ依頼しました「子どもの最善の利益を考えた保育集団発達論の調査研究」の「研究成果報告書」をご紹介します。これは本研究機構で現在進んでいるナショナル・カリキュラムの研究に対しても、より具体的な保育現場の視点が入るため大変重要な報告書です。同時に「子どもの最善の利益を考えた保育集団発達論」は、身近な保育実践を想定できることをテーマにした研究となつていきますので、皆さんが取り組むべき今後の課題や保育内容等についてさまざまな示唆を与えてくれる報告書になっていくと思えます。

研究テーマの中の「集団」という言葉は、違

和感を持つ方もいらっしゃると思いますが、保育自体が集団を形成しているという事実があるため、子どもの権利を踏まえた民主的な保育集団を構築する必要があります。少し飛躍するかもしれませんが、私はその保育集団（園）を「社会」という言葉に置き換えて園の運営をしたいと日々考えています。それは、子どもたちの学び方は「模倣」という方法が中心であるため、言葉による教育より、皆が気持ちよく暮らすモデルとなる社会を構築することが重要課題だと考えているからです。

そこで出会ったのが川田氏の著書『保育的発達論のはじまり』（ひとなる書房、2019年）であり、「個人を尊重しつつ、『つながり』を育むいとなみへ」というサブタイトルから、そのいとなみこそが保育そのものであると感じたからです。これは、後半のアンケートの中にある「大人同士の関係性と子どもたちの関係性には相似性がある」という仮説を踏まえると、職場において「職員一人一人が周囲とのあいだに結んでいる関係の状態」を互いにある程度知り合うことは、チームで保育を進めるうえで必要なことと思われる、という川田氏の言葉ともつながっていると思えます。

「研究成果報告書」というと、その表現方法からして難しく捉えられてしまうかもしれません。川田氏の報告書は比較的読みやすく、なおかつこれからの保育を模索している園にとっ

ては大変役立つものになるということを最初にお伝えし、できるだけ多くの方に読んで活用していただきたいと思っています。

概念の整理

この報告書は、「理論研究編」「調査研究編」の2部形式で構成されています。読みやすいと言ってもかなりのページ数があるので大変かと思いますが、研究課題に関わる3つの概念についての要点整理を読むと、私たちが今日抱えている課題とタイムリーにつながっているため、すぐ引き込まれると思います。それは、(1)子どもの最善の利益とは、(2)保育集団とは、(3)発達とは、という3点についての概念整理です。この論点は、「子どもまんなか社会」を目指すためにまずは考えなくてはいけない課題だと思います。

もちろん川田氏はこれらの概念に対してそこまで踏み込んではいませんが、この整理が重要であることを独自の切り口で興味深く執筆されているので、私たちもこれらの理解をさらに深めることができるはずです。皆さんには、まず保育の根つこともつながるこの部分をしつかりと理解して、その先に進んでいくことをお勧めします。

報告書をぜひ読んでいただくのが一番なのですが、皆さんに興味を持っていただきたないので

少し内容について触れてみます。

川田氏の「集団」の捉え方やその整理の仕方は秀逸ですし、この研究の方向性を知るうえでとても重要な要素になっています。保育集団については冒頭、その規模についても少し触れています。

大きな集団を作ることで、それをコントロールしようとする規制によって管理する組織になりやすい、一方小さな集団では直接的・具体的な人や環境との関わりが保障されやすく、安心して生活し、小さな挑戦と失敗を重ね、健やかに育っていくことができる暮らしになり、乳幼児の育ちに適しているのではないかとという提案です。こうした川田氏の指摘から、あらためて園の規模、クラス数、保育者の配置基準、集団保育の時間等については、子どもの最善の利益を踏まえたうえで、さらに研究する必要性を感じました。

もう一つポイントになるのが、「発達」の捉え方です。これについては、保育所保育指針では2018年の改定から年齢による発達の姿が削除されたにもかかわらず、未だに私たちが考えたねらいに沿って「できないことをできるようにさせる」という考え方が根強く残っているのが現実です。この点での保育の見直しは、ウェルビーイングを目指す中では避けて通れません。

川田氏は保育の場面で、一人一人の「発達過

程」を重視するというベクトルと、それなりの規模の「集団生活」を成立させる必要があるというベクトルとの折り合いをどうつけていったらよいかという問題提起もしています。

主体性の議論

今、乳幼児教育では主体性について大きな議論が起きています。これは本研究機構の委員である久保健太氏も大いに注目しているところであり、ナショナル・カリキュラムの研究においてもよく議論が上がってきます。

川田氏に研究を依頼するきっかけになった『保育的発達論のはじまり』においても、氏は主体性について多くのページを割いています。それだけ重要な論点なので、今回の報告書でも同様に中心的な位置を占めています。それはこの本の副題となっている「個人を尊重しつつ、『つながり』を育むいとなみへ」という言葉ともつながっていくわけです。報告書の「2.『主体性』概念の再考」については特に注目していただきたいところです。

ここでは、6つの視点から主体性を捉えようとしています。ここだけでも1冊の書籍のように詳しく書かれていますので、ぜひ読んでいただき、園内で多くの議論が湧くことを願っています。

ちなみに、皆さんの興味が湧くようにその6

つの項目を紹介しましょう。

- (1) 個と集団を対立させる構図
- (2) 「主体性」が保育を難しくする理由
- (3) 放任論と自己決定論の限界
- (4) 乳幼児保育のために「主体性」を定義し直す
- (5) 「関係の状態」に関与する保育者
- (6) 「待つ」関与と「言葉主義」の関与

いかがでしょうか。気になるところから読んでいっても構わないと思いますが、「個」と「集団」が対立的になりやすいという背景を知るだけでも、自分たちが展開している保育内容について一石を投じることにもなると思いますし、保育者なら常に意識しておきた部分です。さらにクラスサイズや保育士配置基準が、子どもの個々の権利を保障すべき時代にそぐわない水準に据え置かれてきたことや、集団規模の大きさと環境の不十分さのうえに、「超」がつくほどの長時間保育を受けている子どもが低年齢から増加している状況に対する問題提起をします。

ここから「個」と「集団」の対立関係を誘発しやすいだろうという川田氏の論調は、保育の現場での痛ましい事故や事件が頻発している状況とも無縁ではないという指摘につながっています。

ここは構造的な問題もあり、すぐには解決できない部分もありますが、川田氏に研究委託

をした目的の中には現状の保育に対して、私たちがすぐにやれることを考え、実践してほしいという思いもありました。なぜなら、目の前にいる子どもたちにとっては今の瞬間が何より重要な時間であり、この報告書などを参考に自分たちの保育内容を評価しながら、保育のあり方を見つめ直す大きな後押しになるということも想定しました。

川田氏の言う「『発達』と同様に『主体性』も海外から入ってきた言葉である」ということを踏まえて考えると、日本の保育に置き換えたうえで考えなければならぬ課題だと思えます。0歳児〜2歳児の保育を世界に先駆けて展開してきた私たちは、そろそろ大人の都合から、子どもが安心感を持つて自己決定を繰り返し、人とつながり合うことの心地よさを知ることができる保育（社会）を展開する必要性を感じます。その意味では、後半にある「第2部 調査研究編」において実施したアンケートに答えてくれた園の多くが、このことを理解し、先駆的な取り組みをしている状況を知ることができ、大変心強く感じました。

川田氏は、次の「3. 保育実践の役割としての『つながり』の形成」で「主体性とは、その子どもが周囲とのあいだに結んでいる関係の状態である」と定義しています。さらには、臨床心理学者の河合隼雄が呼んだ「日本人の文化的自己像を『いい子アイデンティティ』という

言葉を引用し、あまり自己主張せず、他者からの期待を察して応えようとし、誰からも愛されたいと願う日本人の共同体に対しても警笛を鳴らしています。

保育実践の役割としての「つながり」の形成

川田氏は調査研究の「中間報告」において、保育集団発達論の構築のためには、「人間関係フィルター」を自覚し、乗り越えることが必要であると述べています。それは保育者が子どもの姿や出来事に対して、第一次的に「人間関係の物語」として意味づけようとしてしまう習慣や、日本の社会的文脈では人間関係フィルターが「道徳的まなざし」を強化する傾向があるという指摘です。このことが、各園の保育文化を揺るぎないものに行っていることの原因にもなっているのではないかと思います。

人間関係を重視することは大事なことです。子どもの言動に対して道徳的観念が強く働くことで、子どもの思いを聞き取ることが難しくなり、子どもが周囲との関係（つながり）をつくっていくこうとする際に、抑制的に機能していかないかという問題提起です。子どもたちは興味関心が高く、能動的に活動をする時に、保育者がこの「逸脱」を「創造的逸脱」に置き換えて考えることができるかどうか、「道徳的まなざし（人間関係フィルター）」への偏重予防を

どのように獲得できるかということを考えていく必要があります。

「つながり」の形成…集団観を広げる

「第1部 理論研究編」のしめくくりの部分では、改めて川田氏の研究の広がりを感じてもらえらると思います。

保育の中で子ども同士がどのように「つながり」をつくっているのか。当然、そこには多くの葛藤が生じるわけですが、そこに介在する保育者の役割とはどういったものなのか、保育とはいったいどんなものなのでしょうか。

川田氏の言葉を借りるなら、子どもが周囲の環境や他者とのあいだに、新しい関係の状態、あるいは「つながり」をつくり出していく過程に付き合っていくという保育になることは想像できます。しかし、保育者がリードしていく行事を考えた時に「できないことをできるようにさせる」という方向だけでは、そこから逸脱するような子どもに対して、自ら意味生成をしていくという過程にはうまく付き合えません。さらに、子どもたちが自ら新しい世界をつくり出すためには人間だけに限らず、自然や文化、さまざまな出来事ともつながり、主体的に生きていくということを踏まえたうえでの保育の創造が必要です。

そのヒントを探すが、今回の報告書を通

して紐解かれることを願っています。

第2部 調査研究編 参考になるヒアリングのコメント

第2部では、保育現場で働く保育者や管理職へのヒアリング（インタビュー）と、オンライン方式によるアンケートを行った結果を整理しています。インタビューを受けてくださった皆様、アンケートに答えてくださった園の方々に心よりお礼申し上げます。

研究期間開始からしばらくの間は、新型コロナウイルス感染拡大によって現地ヒアリングができなかったため、私の園で予備調査的にオンラインで実施した後、「子どもの個性と人権を尊重しながら、子ども同士の関係や子どもと環境との関係を育てていく」ということについて課題意識を持たれていると考えた園に協力していただきました。

川田氏は「保育集団発達論」を考えるために必要と思われる主要なカテゴリーを、

- I) 保育の進め方と環境に関する視点
- II) 子どもの関係性や集団の育ちに関する視点
- III) 行事のあり方に関する視点
- IV) 職員のあり方に関する視点

の4点の視点に拾い出し、2歳児と5歳児についてのインタビューを行いました。このやりとりの中には、皆さんの園でも参考になる問答が非常に多いと思います。

ヒアリングを行った5つの園では、「集団」に対してはネガティブな印象を持っている園がほとんどでしたが、この点については川田氏も「『集団』という語彙をどのように扱うべきであるか結論が出せていないが、この課題は保留させておきながらも、人は人との関わりの中で生き、他者があって自己の輪郭を確認できるといいう、『育ち合う存在である』という面は捨てないでおきたい。そして、先にも述べたように、人間中心主義から脱して、自分たちも世界の一部であるという認識を深めていくためにも、他の生物やモノ、コト、シクミといった人間以外の環境との『つながり』を、『保育集団発達』というテーマに接続させておきたい」と述べています。

大人と子どもの関係性

ヒアリングでこの関係性がクローズアップされたのも非常に重要だと感じました。

職員同士、保育者と子ども、子ども同士の関係性への応答では、「職員の人生が豊かになる職場でなければ、子どもの人生が豊かにならない。失敗をおもしろがる風土が職員間であれば子どもたちも失敗を恐れなくなっていく。子どもの人権が守られている園は、大人の人権も守られる」というコメントは、皆さん園のマネジメントにおいても非常に役立つ情報となるはず

です。さらには、行事のあり方についても多くの気づきを提供してくれると思います。

アンケート調査から見えるもの

アンケートは、川田氏自らヒアリングをもとに質問事項を精査し、全国の実態を調査するために「保育者用」「管理職用」の2つの質問紙を用意して実施し、その集計も川田氏に行っていたいただきました。

例えば、子どもや保育の話をも「よくする」、そうした話をするのが「おもしろい」「楽しい」と感じるというコメントなどから、その園の人間関係や保育内容に対する想像が膨らみます。その他の質問項目についても、保育の進め方や子どもの環境との関わり方の考察の部分では「自由」に対する園の考え方を「室内と戸外の行き来」と「室内環境における裁量」という2つの側面での質問や、「室内環境における裁量」では、玩具・道具・素材などを子どもの判断でどの程度使うことができるかという問いなどからも、保育に対する考え方や環境に対する意識変革が起りそうです。

行事のあり方についての考察でも、保護者との一定の共通認識を持つことで、子どもも大人も「当日常義」的な評価ではなく、プロセスに目を向ける可能性を創出することができるかもしれないという部分から、子どもを主体にした

行事の進め方が見えると思います。

子どもたちの関係性や集団としての育ちの考察では、保育者と管理者に分けた質問用紙の対比も行っているため、両者の子ども観や保育観の違いに対する分析に興味を惹かれました。それと同時に、子どもたちの生き生きとした暮らしを支える保育者の感性を活かすためにできる支援を考えることはもちろん、この違いを念頭に置いて議論することの大切さにも気づきます。

おわりに ―発達と集団の捉え直し―

今回の研究のまとめのところで「集団」について、個々の子どもや保育者、園という共同体や経営体とのあいだにある「中間集団」という考え方が出てきました。その理由を川田氏は、「主として個人に焦点を当てた側面が『発達』と『主体性』であるが、保育の場では個人を超えた視点が不可避である。それが『集団』への視点である。ただ、『集団』もまた歴史的に刻印された意味のヒダを帯びているため、ここでは『中間集団』と呼んでおきたい」と説明しています。

こうした「集団」の捉え方はある意味、私たち自身がそこに対する先入観を捨て、「発達」や「集団」について改めて新しい視点と専門性も持って考え直すことの重要性を示した提言で

もあると感じました。

冒頭にも私見を述べさせてもらいましたが、保育集団を国とか社会、地域に置き換えて考えると、子どもたちはその市民であるという発想につながります。そう考えると、保育におけるシチズンシップの重要性にもつながってきます。川田氏自身は、発達心理学が専門分野ですが、同時に保育・教育にも精通しているために、「個」の発達を重視しながらも、それが生きる「集団」のあり方についての可能性を「子どもの最善の利益を考えた保育集団発達」への研究で丁寧にまとめようとしています。

保育をいかに平和で民主的な環境にできるか、それこそが乳幼児教育の基本です。生涯教育のスタートとして、一人一人に対していかにウェルビーイングな生き方ができるように支援することができるか、そして園の役割について考える時、今回の報告書は大変重要な視点になると思います。

ヒアリング調査とアンケート調査を通して、個と集団の問題を考えるためには保育における「自由」とは何かについて議論を重ねる必要があることを痛感した川田氏にでき得るなら、さらなる研究をしていただきたいと思います。

保育・子育て総合研究機構

研究企画委員会委員長

島本一男

「子どもの最善の利益を考えた保育集団発達論の調査研究」
川田 学・北海道大学大学院准教授
「研究成果報告書」は、HP あおむし通信に掲載しています。



<https://www.zenshihoren.or.jp/activity/ic/kenkyu.html>